

安心

自分らしい生活 続ける



散歩から戻ると、いつもテツの足をふいてやる」といふタエさん（滋賀県東近江市の自宅）

日常生活自立支援事業 介護など福祉サービスの利用手続きや、通帳などの預かり、公共料金支払いなどの日常的な金銭管理を手伝い、暮らしを支える事業。認知症高齢者や知的障害者などで判断能力が不十分な人が対象。全国にある社会福祉協議会が実施。利用料は社協ごとに異なる。

「本人の思い」をかなえる地域づくりが「一番大事なじゃないでしょうか」。

「テツ、あそこに花が咲いてるな。きれいやなも」
紅葉の里で知られ、豊かな自然が残る東近江市の永源寺地域。タエさんは、いつものように杖を片手にテツと散歩していた。

本人の思い

認知症 明日へ

一人暮らしで認知症になっても、自分らしい生活を続けたい。滋賀県東近江市に住むタエさん（76）（仮名）は、そんな願いを持ち、診断後も住み慣れた自宅に愛犬テツと寄り添って暮らしている。その日々を支えているのは、地域の住民と医療福祉関係者の連携プレーだ。
（本田麻由美、写真も）

「し、きほって運動がてらな」
屈託のない笑顔で、何度も、何度も、そう話す。一人暮らしのタエさんの認知症に気づいたのは、かかりつけ医の花戸貴司医師だった。タエさんは20年前に夫を亡くし、子供はない。心臓に持病があり、定期的に診療所に通っていたが、診察日に来なかつたり薬の飲み忘れが増えたりしたことから、3年前に検査でアルツハイマー型認知症と診断。介護サービス利用のため行政に連絡し、依頼を受けたケアマネジャーの佐藤陽一さんが自宅を訪れると、カップ麺の食べかすや汚れた衣類などが散乱し、ゴミ屋敷のようだった。

暮らし続けたいというタエさんの思いを受け、関係者が連携して生活の環境整備に取り組んだ。まず、地域の人に理解してもらうため、民生委員らに連絡。「火の始末が不安」との声が上がったため、電気カーペットや電気ポットを使うとともに、火を使う調理は、毎日朝夕2回訪問するヘルパーが行うことにした。

掃除や買い物、服薬確認などもヘルパーにやってもらう。洗濯は、近所に住む惣夫婦が全自動洗濯機をプレゼントしたが、新しいことを覚えるのが難しいタエさんはそれを使わずに、長年愛用してきた2槽式洗濯機で、ヘルパーの助けを受けながら自分でする。服を着たりトイレに行ったりは自分でできるが、入浴は週1回のデイサービスで済ませている。

大問題なのが食事の管理だ。食べたことを忘れ、ヘルパーが1日分として調理し、小分けしておいたものも夕飯前に食べてしまう。自分でご飯を炊飯器いっばいに炊き、1日分で食べてしまったこともあった。体重も増え、持病に悪影響を与えかねないことから、ヘルパーらが連携して食べ物を隠す「秘密の場所」を考案。「棚の奥」「コンロ下」「鍋の中」と工夫したが、それでもタエさんは見つけてしまう。現在、4か所目はまだ無事だが、イタチごっこが続いている。

食事、金銭管理

住民とヘルパーら支援

「普段はテツとテレビを見とるが、友達が遊びに来てくれるし、近所の商店に買い物も行く。散歩に出ると友達に会っておしゃべりするしな」。そんな日々を送るタエさんは「動けるうちにはここで暮らしたい。家は自由で気ままがきくし、テツもおるで」と語る。そのため毎日、散歩を欠かさないといい。今も状態も落ち着き、いつも笑顔のタエさん。その様子に、花戸医師は「周りの多くの人に日々支えられているという安心感によるものだろう」と、地域の力を痛感している。「認知症だから、一人暮らしだからといってすぐに施設などに入れてしまうのではなく、つながりを持つ地域の人と専門職とがチームとなって、その人が安心して暮らせるよう支える。認知症高齢者が増える中、そんな『本人の思い』をかなえる地域づくりが一番大事なじゃないでしょうか」。